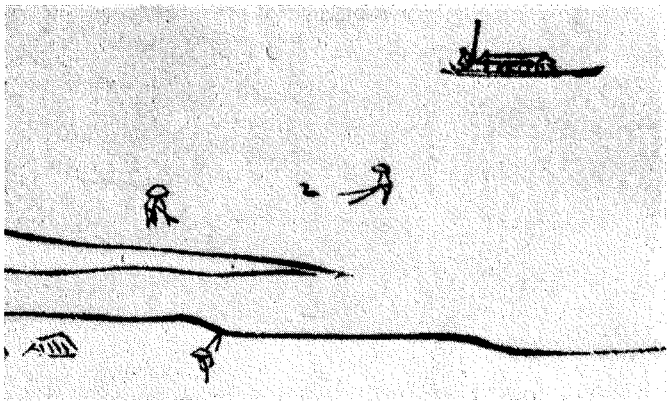
はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

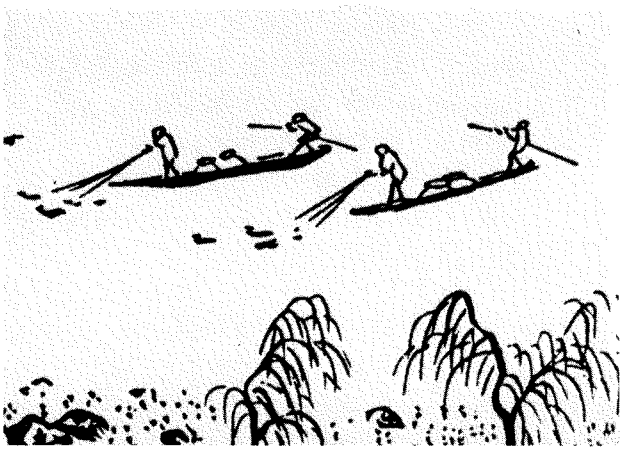
あるむぜお

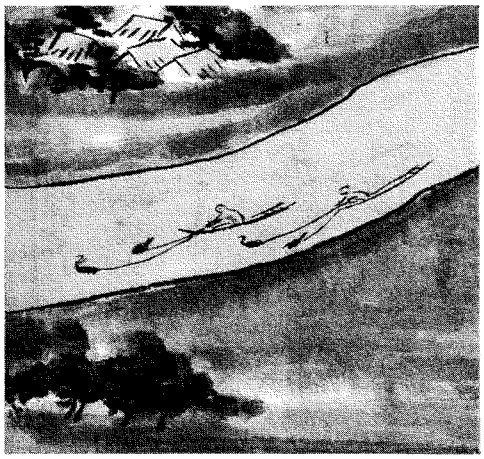
府中市郷土の森だより　No.33　al museo



多摩川の風景１　鵜飼い

多摩川の浅瀬で、何やら鳥のようなものを綱で操っている網笠の男は、いったい何をしているのでしょう。たとえば、『**調布玉川絵図**』（右上、本館蔵）。源流から河口までたどる長い長い絵巻の中で、１か所ここに見つかりました。場所は府中の中河原のあたり。『**江戸名所図会**』（左上、本館蔵）の多摩川の挿し絵もよく探してみますと、いました、いました。彼らは、鵜を使って鮎を捕まえる「鵜飼い」をしている漁師（鵜使い）さんですね。多摩川中流域の鵜飼いはずいぶん古くから行われ、明治には見せ物としても有名でした。絵の中の屋形船も見物客を乗せているのかも。下は、『**武野八景**』（左下、無窮会覆刻版より）のひとつ「玉川観魚」と『**四神地名録**』（右下、国会図書館蔵）の府中分倍河原付近の絵。多摩川は「徒鵜飼い」が普通でしたが、この絵は「舟鵜飼い」です。（O）



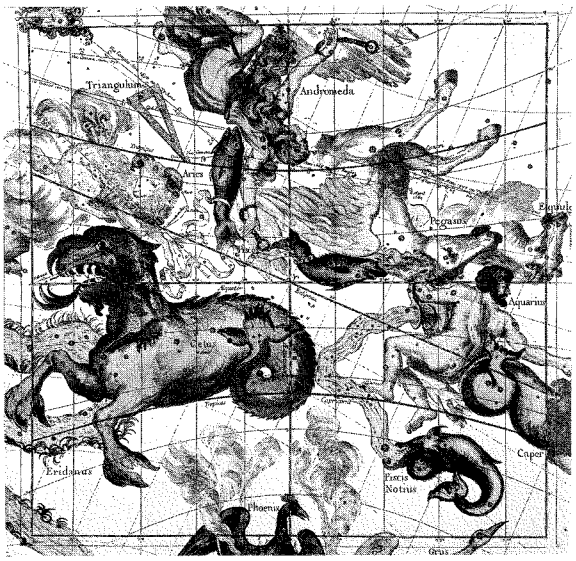


特別展　　'95. 9. 15〜10. 15

星座の文化史

—古星図と天球儀に描かれた星座たち—

現在認識されている88星座の起源は古く、紀元前約3000年までさかのぼることができます。最初の星座は、黄道12星座が中心であったようです。初めて描かれた星座絵は、石や粘土に刻まれており、これらの多くはメソポタミア地方やエジプトのピラミッドなどに見ることができます。その後、アレキサンドリアで活躍していたプトレマイオスによって、ギリシア神話などから取り入れられた星座の数が48に統一されると、約1500年の間増減はありませんでした。



星座絵はこの間、アトラスの天球儀などで見られる程度のごく限られたものでした。

しかし、16世紀に入り、航海術の発達に伴う大航海時代を迎えると、同時に天文学も大きな進歩を遂げるようになりました。航海士や天文学者、あるいはアマチュア天文学者によって次々と新しい星座が誕生していったのです。

星と星をつないだ線を基に描かれた星座図が数多く出版され、それらはあたかも印刷された地図のように様々な工夫が施された素晴らしいものでした。

16世紀から20世紀の初めまでに、星座の数は増減を繰り返しながらついに120近くにものぼりました。星座の内容は新大陸で見られた生物や地名をはじめ、時の国王に因んだものや、発明器具、ペットの名前、天文学者の趣味からとったものまでが名前に使用され、非常に混乱しました。

やがて天空の星々にも整備される時代が訪れました。1928年に国際天文学連合は、プトレマイオスの48星座に40の星座を加えた88星座を定めました。

本展示会では、千葉市立郷土博物館所蔵の西洋の星図と、中国や日本で作られた星図の資料70点余を一挙に紹介します。

絵画の面からも非常に価値の高い作品群であると同時に、星図や天球儀に描かれた座標線のしくみも理解できることと思います。いろいろな角度からご鑑賞ください。　（I）

天文講演会

古星座に見る星座たち

講師：原　恵氏（青山学院大学教授）
日時：10月8日(日)　午後3時〜4時30分
会場：博物館1階大会議室
料金：無料
（但し、入園料が別途必要です）

秋のプラネタリウム新番組

『天球に描かれた星座たち—夜空は大きなキャンバス—』

平成7年9月10日〜12月10日　観覧料　大人500円　子供250円

星座の生い立ちから88星座までの変遷と、星座図のしくみを、映像でやさしく解説します。

自然講座　博物館で学ぶ生物学　その4

我々人類から見れば、気の遠くなるほど膨大な時の流れとともに、実に様々な生物が地球上に出現し、進化を遂げてきました。その経過は前回までにひととおり説明してきましたが、さて、この多様な生物のひとつひとつはどの様に整理・分類されているのでしょうか。「博物館で学ぶ生物学」の基礎ともいうべき部分を考えていきたいと思います。

═生物の分類═

生物が持つ多様性への興味を追求するということは、まず生物とは何であるかを理解し、体の仕組みや生活の手段を把握するということです。これらの知識が増えてくるにつれ、何らかの形で仲間分けをする必要が出てきます。今までお話ししてきた生物界の歴史（進化）を考えながら導き出すことも、非常に重要なファクターであることはいうまでもありません。そして見出されたある基準に基づき、似たもの同志グループ分けを行っていくことが「分類」というわけです。

分類には大きく分けて、人為分類と自然分類があります。古代の生物学は分類から始まったといわれるように、人間の生活に必要なものを整理する手段として行われていたようです。まだ基準となるものが少なく、分類の方法もはっきりと分かりやすいものでした。たとえば植物を薬草と毒草、野草と作物、作物の中でも、食用・飼料・繊維、さらに食用作物を穀類・豆類・イモ類・野菜類といった具合に分け、動物も有用動物と有害動物、水生動物と陸生動物など、利用面を主体として単純な特徴を基準にしていたようです。この方法を人為分類と呼びますが、生物の本質的分類ではなく、あくまで便宜的・主観的なものにすぎません。

これに対し、体のつくり、発生の様子、生活史、生活手段、細胞の染色体数及び形、化石などをもとにして、生物の類縁関係を明らかにしながら似たもの同志を１つのグループにする世界共通の分類法を自然分類（系統分類）といい、自然そのものの中に認められるつながりに従っています。

═分類体系═

科学的な分類学は、リンネ（スウェーデン）が分類の基本的な単位を「種」としたことに始まります。「他の個体群と明らかに区別できる形態的な特徴を持ち、同時に同一間では形態や生活方法に共通性があり、しかも安定したものであり、また、同種の雌雄間では生殖力を持つ子供を作ることができるもの」と述べています。

この「種」をいくつか含む、より広い範囲の性質を持つ段階を「属」といいます。さらにその上を科・目・綱・門・界の階級とし、その中間に亜門・亜綱・亜目・亜科・亜属・亜種を置く場合もあります。たとえば「ヒト」の分類上の位置は以下のようになります。

「動物界―脊椎動物門―哺乳綱―真獣亜綱―霊長目―真猿亜目―ヒト科―ヒト属―ヒト *Homo sapiens*」

この時ヒトという種を示す２語は、その種が属する属名とその種を表す１語（種小名）を並べて書き、そのあとに命名者の名を加えたものが万国共通の名、「学名」として用いられます。学名は国際命名規約に基づいてつけられるもので、ラテン語、またはギリシャ語を用い、文字はローマ字で表す二名法となります。

学名はさらに細かく亜種・変種・品種などをつけた三名法で記載する場合もあります。生物の分類上、大きな違いはないのですが基本種に比べて形態的差異が２つ以上あり、地理的に分布を異にする個体群である変種や、たとえばイネにあるコシヒカリやササニシキなどの品種といったものについての表記に使います。

150万種を超えるといわれる全ての動植物について分類は成されているのです。　（N）

「南十字星をもとめて」制作記

馬場　弘修

プラネタリウムの番組を企画するにあたり、テーマを決定し構成内容を考えることは制作にかかわる担当者にとっては楽しくもあり辛い期間でもあります。自分自身の感性と、プラネタリウム本来の機能性をドッキングさせることによって、いかに一般観覧者に対し伝えたいテーマをアピールできるかが、担当者の腕の見せ所といえるでしょう。今回、平成6年度の春番組を担当し無事に投影期間を終えたことで、いろいろな反省を踏まえて制作過程を紹介いたします。

1．テーマの決定

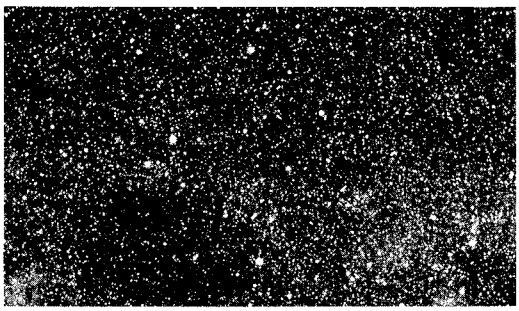
春という季節と、星空に対するロマンチックさを表現したいと考えて、一般の人々にも知られている「南十字星」をモチーフに話を膨らませようと企画しました。大きなポイントは3点です。

(1)東京から見ることのできない「南十字星」をもとめて、旅行形式で南半球（オーストラリア）へ出かける。

(2)南半球へ移動することで、緯度の変化による星座の見え方の違いを説明する。

(3)ヨーロッパの大航海時代に作られた天の南極付近にある星座たちを紹介する。

これらを軸に、番組の中で観覧者に伝えたい必要最低限の項目を考えていくのです。また、この企画を当博物館職員による全体会議で検討し、ストーリーの流れや展開などについて修正を加え、春番組の企画書が完成となります。



＜南十字星（撮影：木村直人）＞

2．制作業者…

当プラネタリウムでは開館して以来、ある特定の専門業者との間で番組制作を行ってきました。しかし、使用される絵や音楽の雰囲気や映像展開などに目新しさが薄れつつある傾向が感じられていました。もちろん企画する側にも工夫が足りなかったのでしょうが、マンネリ化とも思える現状をどのように変えていけば良いものか試行錯誤を繰り返していたのです。そこで、前作となる冬番組では「企画コンペ」を初めて取り入れて制作したのです。企画コンペでは、他のプラネタリウム館でも番組制作と組込み実績のある複数の業者に、番組の企画意図を伝えたうえで脚本（映像展開の絵コンテ含む）と使用する絵を数点、見積書などを提出させ選考を行います。選考にあたっては、審査員として外部の識者や当博物館の天文担当以外の職員を加えて、一般観覧者へアピールできる作品かどうかを協議します。（もちろん、審査員が検討材料として使用する資料には業者名が伏せてあります。）このような過程を経て、採用作品を決定したのです。ちなみに冬番組では、従来の制作会社と違うところに発注することになり、今までの雰囲気とは異なる新鮮な番組として評価を得ることができました。

春番組でも「企画コンペ」方式とし、3社から作品の提出を受け、冬番組と同様に、いろいろと協議したうえで制作業者を決定したのです。

3．番組内容は…

採用作品となった脚本について、制作会社の担当者と詳細な内容の打合せを行います。企画書だけでは伝えられない微妙なニュアンスと雰囲気の出し方を話し合いによって形にしていくのです。さらに、映像展開などについても変更や追加を繰り返しながら脚本の最終稿が出来上がります。今回は、約1時間の番組全体をひとつのストーリーとして、普段はテーマ番組の前半に行っている「今夜の星空紹介（生解説）」を

番組の中へ取り込む形にしたのです。

オーストラリアへの特別ツアーをパンフレットで見つけた男女二人（恋人同志か若夫婦かは観覧者の想像にまかせる）が、夜の飛行場から飛び立ちます。機内でのアトラクションとして、当日の夜に東京で見ることのできる星空を紹介(30分の生解説)しながら、赤道を越え南半球へ。ハワイ諸島と同じくらいの緯度で見た星空をながめながら、東京との見え方(星座の位置など)の違いを確かめていきます。また、ニュージーランドに伝わる星にちなんだ話をアニメ調の絵で動きのある展開をさせることで、子供にも楽しんでもらえるよう工夫しました。目的地であるオーストラリアの自然や珍しい動物たちを写真で案内するとともに、現地での南十字星の見え方や、天の南極付近にある星座たちの成り立ちを紹介します。シドニーに到着した二人は、星祭りが行われるエアーズ・ロックへと出かけ満天の星空を堪能し感激に浸るのです。寄り添いながら南十字星を見上げている二人のシルエット。そして、夜空を駆け抜ける流れ星に彼女が心の中で願いをかけます。

「もう一度、彼と二人で南十字星を見に来られますように……。」

番組の最後を盛り上げる音楽が鳴り響く中で、エンド・クレジットがフェード・イン。

番組は、ツアーに参加する男女の会話とチーフパーサーの語りで進行します。使用する音楽の雰囲気はFM東京のラジオ番組「ジェット・ストリーム」を思い起してもらえるように選曲し、ある程度大人（恋人同志など）を集客対象として番組構成をしたのです。

4．宣伝方法は…

広く一般の方々に番組をアピールするために当プラネタリウムでは番組宣伝ポスターを製作し、近隣の主要な駅に掲示を行っています。いろいろなポスターが貼り出されている中で、いかに人の目を引くことが出来るのかがデザインの考えどころです。今までは、番組に使用する絵や写真を数枚組み合わせて図案を作っていました。この方法では、表現する内容に限りがあり、十分なアピールができていたのかは分からないというのが現状でした。

春番組のポスターでは、広告会社に完成台本を渡して、その内容からデザイナーに図案を数点提出してもらい検討を加えていきました。このことにより、内容のイメージを優先し下図の絵柄が出来上がったのです。また、番組のタイトルを「南十字星をもとめて」とし、内容が伝わるようなキャッチ・コピーもデザイナーと協議のうえ、ポスターの両脇に

「南十字星の魔法」

「プラネタリウムでかけてあげる」

を入れることにしたのです。南十字星にはサザンクロスという振り仮名をつけ、読んだときのリズムが良くなるように工夫を加えました。番組のサブ・タイトル以外にキャッチ・コピーを入れたのは、初めての試みでした。

5．観覧者の反応は…

投影期間中に観覧者を対象としたアンケート調査を行い、その結果から狙った客層には好評を得られたものと判断しています。しかし、小さな子供たちにはテーマ部分が難しかったようです。ただ、番組の中でニュージーランドに伝わる星にまつわる物語を入れたことで、子供たちにもアピールできたと思っています。

今回は集客対象を極端に絞り込んだうえで、番組構成やポスター製作を行ったので、企画意図を観覧者へ伝えることに成功したと考え、今後の番組製作にも工夫や新しい試みを取り入れてより良い番組作りを目指します。

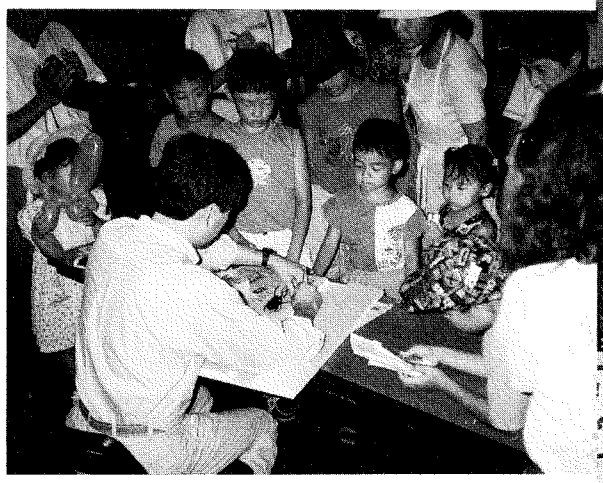
カメラアングル

特別展 世界の昆虫博

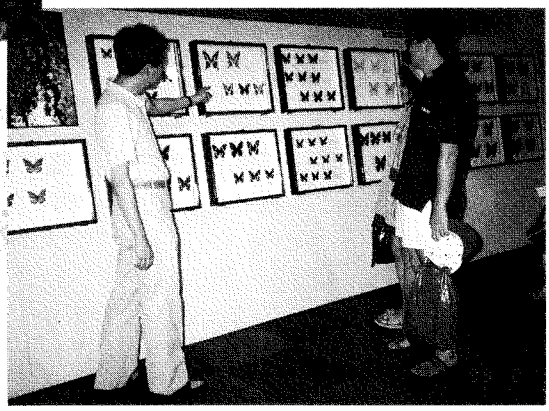
7/20～9/3

とにもかくにも大盛況！ '95の夏は「世界の昆虫博」に連日多くの観覧者がつめかけました。お暑い中、本当にありがとうございました。世界各地の昆虫たちは何を語りかけてくれたのでしょうか？

標本箱を見つめるお客さんの表情は真剣そのもの。今にもはばたき、飛んでいってしまいそうな昆虫たちにそれぞれの想いをこめているようで……



「世界の昆虫博」のスペシャル・パフォーマンス。日曜毎に開催した、アトラスオオカブトムシの標本づくり実演も大好評！"昆虫大王"平岡先生を取り囲む大勢の子供たちに熱気も急上昇。



＝最近の発掘調査から＝

今回は、江戸時代の終わり頃、はるばるヨーロッパから海を越えて渡ってきた珍しいやきものについてご紹介しましょう。

このやきものは、旧甲州街道の大国魂神社前、郷土の森に移築・復元されている旧田中家住宅跡地の西側で見つかりました。絵柄が特徴的で、ヨーロッパの貴族と思われる人物とその子どもを抱いた夫人、従者の男性、その背後には貴族の邸宅らしき屋敷が描かれています。また、その風景はちょうど狩りを終えて帰ってきたところらしく、中央の人物の手には狩りの獲物が握られており、その獲物を夫人と子どもに誇らしげに見せているところのようです。内面は、草花の文様が器を巡るように施され、中央部には外面と同じような建物が描かれています。これらの絵柄は、白く透明感のある地肌の上に色鮮やかなコバルトブルーに発色した染付で絵付けされています。

この絵付けは、1740年代にアイルランドのダブリンで創案された銅板転写紙によるもので、銅板プリントウエアとも呼ばれています。創案された時は、タイルのような平面に絵付けされていたのですが、その後しばらくしてなめらかな曲面にも応用されるようになり、19世紀前半になるとこの銅板転写紙による染付のやきものが大量生産され、全世界に向けて輸出されるようになったそうです。当時、日本の唯一の貿易国であったオランダにもこの絵付け技法が伝わり、マーストリヒトのペトルス・レグート窯を中心として、オランダ独自の染付を生産し、日本に輸出していました。日本への舶来品は、そのオランダと本家であるイギリスの銅板プリントウエアがあるそうで、底部（高台）の裏側にどこの国で焼かれたものかがわかるように各国の「窯印」がスタンプされています。残念ながら、今回見つかったやきものはこの部分が欠けているために、どこの国で焼かれたものかはっきりわからないのですが、こうしたやきものを専門に研究している方によれば、オランダの製品と考えられるそうです。伝世品の中には、天保・嘉永・安政・文久（1830～1864年）など幕末期の年号の入っているものが多く、このやきものもその頃府中に伝わってきたものと考えられます。

このやきものは、現代の私たちが見てもその絵付けの美しさに惹かれるように、当時の日本人にとっては憧れの的であったらしく、幕末期の陶芸界の中では、日本独自の開発に熱中し、舶来して間もない天保年間（1830～1844年）には、すでに銅板転写紙の開発と磁器への転写焼き付けに成功したと伝えられています。その後、日本に文明開化が訪れると、瀬戸・美濃地域を中心として、銅板プリントウエアの染付が大量生産されるようになっていきます。貴重な舶来品であったやきものを見て、これと同じやきものをなんとか自国で生産したいという陶芸家の熱い想いがそれを成し得たのでしょうか。

これと類似したやきものは、江戸の大名屋敷跡などで見つかってはいますが、これほど残りの良いものは非常に数が少ないそうです。また、このやきもの自体をよく観察すると、表面にはほとんど傷や汚れがなく、所有していた人物がとても大切に扱っていたことがうかがわれます。それほどの珍品かつ高級品を所有していた人物は、当時の府中の中でもかなりの有力者だったことは間違いないでしょう。

幕末期の陶芸家たちがその絵付けの素晴らしさに惹かれ、銅板転写絵付けの開発に熱中したのもうなずけるやきものと言えましょう。

（府中駅南口再開発事業地区の調査から　江口）

（撮影：小野智光）

あれこれ

—災害と考古学—

火災の巻

奈良・平安時代、ここ府中からは、北方にそびえ立つ壮麗な国分寺の七重塔を望めたはずです。しかし、記録によれば、この七重塔は承和2年(835)に神火により焼失したとあります。ここでいう神火とは、おそらく落雷による火災と想像されますが、失火の原因はともかく、この塔の焼失は、発掘調査で多量の焼けた瓦が出土したことによって、考古学的にも証明されています。

さて、こうした落雷に限らず、古代の人々、特に草葺き屋根の竪穴住居に暮らす庶民は、常に火災という災害と隣り合わせにあったようです。

実際、発掘をすると、竪穴住居の埋め土の中に柱や屋根材などが炭火して残っていることがあります。当時、焼け出された住民のことを思えば失礼なことですが、このような焼失住居は私たちに実に多くの情報をもたらしてくれるありがたい存在なのです。

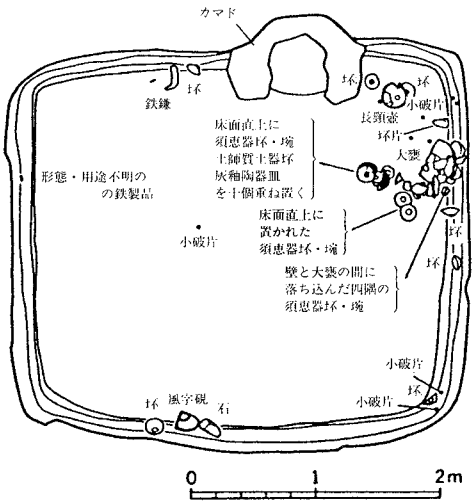
そのご利益を2つほど上げてみましょう。

その1は、火災によって家屋が倒壊すると、その建築部材が竪穴内に炭化した状態で残る場合があり、竪穴住居の上屋構造を考える上で極めて貴重な情報が得られることです。普通、建築部材は腐って残りませんから、柱や垂木、梁などがどのように組まれ、どんな屋根を葺いていたのかといった事柄は、まさに良好な遺存状態の焼失住居から検討するに限ります。

ただ、炭化材が良好に残ることは極めて稀です。府中市域では、本誌11号で寿町1丁目の事例を紹介したように、屋根材をくくり付ける垂木が残されていたり、屋根材の草が蒸し焼きのような状態で見つかったこともありますが、上屋の構造を復元できるほど良好な事例には恵まれていません。しかし、こうした一つ一つの事例を積み重ねていけば、将来これを総合的に検討することも可能となるはずです。

ご利益その2は、普通なら住居の廃絶とともに持ち出される家財道具が、火災という不慮の出来事のため、住居の中に残されたまま埋もれていることです。したがって、家財道具の種類や数はもとより、それらの配置から住居内の空間利用の仕方に迫ることも可能となります。

試みにその実例を簡単に紹介してみましょう。左の図は府中町2丁目のマンション建設現場で見つかった焼失住居での遺物の出土状況です。ここで出土した土器は、坏16、椀7、皿1、長頸壺(ちょうけいこ)1、大甕(かめ)1と極めて多く、いずれも床面かほぼそれに接するような状態にありました。しかもそのほとんどはカマドの右側に集中しています。このうち10枚の坏・椀・皿は重ねられた状態で置かれていました。また、大甕の置かれた床面は堅く窪んでいて、これが水甕として用いられていたことを教えてくれます。したがって、この住居ではカマド右側が台所のような空間として利用されていたことが判るのです。



ここまで、焼失住居から得られるご利益を紹介してきましたが、現代の私たちは未来の考古学研究者にご利益を与えないよう注意したいものです。 (F)

あるむぜお　第33号

al museo　イタリア語
"博物館で" "博物館にて" の意

発行日　1995年9月20日

発行　(財)府中文化振興財団
府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921